

私の価値観を大きく変えた出会い

佐久長聖中学校 三年 西澤 唯花

私は、この夏、佐久市の中学生海外研修に参加し、エストニアを訪れました。

エストニアは、九州より少し大きい面積に約百三十万人が暮らす小さな国です。

ロシアやドイツなどの大国に囲まれ、度重なる戦争を経て一九九一年にソ連から独立しました。

独立後はITを活用したデジタル化を進め、世界から注目される国づくりをしています。

そのエストニアのサク市と長野県佐久市は、同じ「さくし」ということから姉妹都市を結び交流しています。

私は現地で、エストニアの中学生が母国語のエストニア語に加え、小さいころから英語を学び、中学ではさらにドイツ語かロシア語を選択して学んでいることを知りました。

その姿に驚くと同時に、日本の英語教育の遅れを痛感しました。

エストニアの子たちからは、「なぜ日本人は英語を話さないの?」とよく聞かれました。

「話さないのではなく、話せないんだ」と説明しても、なかなか理解してもらえませんでした。

多言語を話すことが当たり前のヨーロッパでは、「話せない」という感覚そのものが理解できないのです。

ヨーロッパだけではなく、アジアで考えると中国、韓国も自国語に加えて、英語を話します。

うっかり口がすべって、「日本人はばかなんです!」なんて言いそうになりましたが、ぐっとこらえました。

私は少し恥ずかしさを感じ、「日本人は努力していないのではないかとまで思っていました。

そして、今度は十月にエストニアからホームステイ先の子たちが、日本を訪れて佐久市で数日間過ごしました。

そこで気づいたことは、店員さんや善光寺の和尚さんなど、多くの日本人が、日本語が分からないエストニア人に、英語ではなく日本語で話していたことです。

私がエストニアに行ったとき、現地の人たちは日本人に、母国語のエストニア語ではなく、世界共通語である英語で話していましたが、日本人は、英語よりも母国語の日本語で対応していたことが多かったのです。

ここでも、「やっぱり日本人は英語が苦手なんだ」と痛感しました。

しかし、最後に彼女からこう言われました。

「最初は、なぜ日本人が英語を話さないのか不思議だった

けれども、このグローバルな世界でも、母国語の日本語を大事にしている日本人の心が素晴らしい

世界中で英語が第一言語とする波に飲み込まれていない日本は、日本語を大切にし、自我を持っていることが分かった

よく考えたら、日本に住む人は日本語でいいんだ

だから、私はエストニアに住んでいるから、エストニア語でいいんだ」
日本は遅れていて恥ずかしいと思い込んでいた私は、彼女の言葉に

ハッとなりました。

私は、実は日本の文化や言葉を誇りに思っていなかったのです。

彼女はさらに、エストニアの現状も語ってくれました。

ソ連から独立して三十年、人口の四分の一がロシア人であり、エストニアでは今もロシア語を話す人の方が多く、国民の中には「エストニア人の国なのに、なぜロシア語やドイツ語も勉強しないといけないの」と複雑な思いを抱える人もいるそうです。

歴史や言語に対して深く考え、国の未来をどう築くかを真剣に話す彼女の姿に、私は強い印象を受けました。

また、臼田中学校と野沢小学校を見学した彼女は、「日本の生徒は、常にだれかと一緒にいて、周りに合わせすぎていて、自分の意見を言うことに慣れていない」と感じたそうです。

彼女は、「自分の意見が言える環境を小さい頃から整えた方がいい。そのためには、もっと学校の先生が自分の意見を言えば、子どもたちも自分の考えを表現できるようになる」と話していました。

彼女は、自分の国のことに対してよく理解をしていて、社会問題に対して関心が深く、洞察に優れていました。

そして、挑戦を恐れず、未来を見つめている彼女は、若い起業家に見えました。

そういう若者が多いからこそ、エストニアの発展は目覚ましいのだと思います。

一方で、今の日本はコンプライアンスやハラスメントに過剰反応しすぎです。

あれもだめ、これもだめ、そんな安心安全第一の環境にいたら、新しいことに挑戦する一步を踏み出すハードルを高めてしまうと、

思うのです。

それによって、意欲的な気持ちや可能性を潰し進化がなくなります。このままでは、日本はさらに停滞してしまうのではないのでしょうか。

私はこの交流を通して、自分の国に良さを再発見し、同時に今の日本の課題にも気づきました。

これからは、エストニアで出会った仲間のように、自分の意見を持ち、社会に積極的に関わる人になりたいと思います。

そして将来、日本の未来を前向きに動かしていける大人になれるよう、これからも勉学に励みたいと思いました。